

この世とあの世

生きている限り避けて通れないのは、どんな人でもいつかは死ぬということです。アイヌの人々はこの問題についてどのよ



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

うに考えていたのでしょうか。世界の三大宗教といわれる仏教、キリスト教、イスラム教も人間は死ぬと生前の行いにより、魂は極楽や天国または地獄に行くことを教えています。

アイヌ民族の考え方では、そもそも至上神及び諸々の神が、神々の住むあの世を参考にしてこの世を創造し、そこへ平素の神々の姿を模倣して人間を誕生させました。ただし、人間はこの世に住み、老いて死を迎えると容器である肉体をこの世に残し、肉体にあった靈魂はあの世に向かい、しばらくするとまたこの世に戻り、母体から肉体を分けてもらって再び生まれ変わるというサイクルを繰り返します。そこに地獄は存在しません。

但し、生前、窃盗、殺人など悪行を働いた人々はポクナモシリ (pok-na-の方の mosir-国土) という草木も生えず鳥も獣もない不毛の地に追いやられるといます。世界の宗教と違うのは、ポクナモシリもあの世の一部だということです。肉体が減んでも魂は存在し続けるという点では世界の宗教と共通していますが、アイヌ的死生観では、人間の行き先は天上界であって、下界のこの世とあの世の行き来を繰り返すこととなります。しかし、あの世に行って、またこの世に生まれ変わるまでの時間は、生きている間の行いにより違うそうです。行いが正しかった人は、あまり間をおかずに生まれ変わってこの世に戻ってきますが、そうでなかった人は生まれ変わりに時間がかかります。また、この世に戻ってくる際には両親となる両家の祖先や神が推薦する人物審査に合格しなければならず、その際もやはり生前の行いがものを言います。これは動植物や物体でも同じだそうです。生き物だけではなく、モノも生まれ変わるのです。現在SDGs(持続可能な開発目標)が盛んに宣伝されていますが、モノの生まれ変わりはモ

ノのリサイクルと言い換えることができ、時代の最先端ということになります。

動植物も人間による儀式で送ってもらった場合は、

自然死や事故死したものよりも生まれ変わりに時間がかかりません。送りの儀式での祈りの言葉やあの世へのお土産としての供物は生まれ変わりの加点条件となるからです。前にも少しご紹介したことがありますが、^{ひくま} 獵師を襲った^{なた} 熊の額に鉋で傷をつけ、捕獲して送りの儀式をしたところ、数年経って、同じ獵師が前に獲った熊と全く同じ場所に傷のある熊を授かり、また数年経って同じような熊を授かりました。アイヌの人々は丁寧に送ってあげたので、自分たちに肉と毛皮を授けるために同じ熊がすぐに生まれ変わってきてくれたのだと信じたそうです。

では、あの世とはどのようなところなのでしょう。一度死んで生き返ったアイヌの男性の話が残っています。その人によれば、先が見えない暗いトンネルをずっと進むと奥に行くほど幅が狭まります。前方に出口らしき小さな光が見えたので進み続け、出口をやっと通り抜けると、広々とした草原に家が点在し、家々からは煙が立ち上っているという非常に美しい場所に出ました。そこには亡くなったはずの人々が暮らしていますが、そこの人々にはこの世から訪れた人の姿は見えません。犬だけが異界の人を見ることができるとのことです。この話を伝えた実在の人物はそこで亡くなった両親に会って話をしたといます。両親は息子の供養が十分でないために、肩身が狭いからなんとかしてほしいと言ったそうです。仮死状態から生き返った男性は、早速両親のためにアイヌ式の供養を執り行いました。アイヌの世界に限らず、似通った話は時々耳にします。死んだら何もかもゼロになってしまうと考えるのと、まだ先があると信じるのでは生き方自体に影響を及ぼすほど大きな違いがあります。皆様は如何にお考えでしょうか。



*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び、実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリィマン社、2019年)、『平成20~令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~13』(北海道教育委員会、2008~2022年)等。